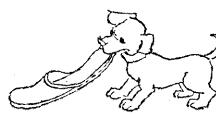


# 三 才 児 と 小 動 物

(二)

清 水 工 ミ 子



## 例 3

一才四月 女兒 祖母と母親と来園

家 庭

家にはねこが一匹いるが、祖母が、あぶながつてさわらせないと  
め、あるきまわるのを見るだけでさわろうとしない。

絵本の動物は犬好きでよろこんでみるが、どの動物も「ニヤアニ  
ヤア」というのでこまる。

そのためたびたび動物園につれてきて实物を見せ、なき声も聞か  
せたいと思って子ども動物園にもそのたびにつれて来ている。

子ども動物園の中は、自由にとびまわるが、何回来ても動物はさ  
わらない。しかし動物のそばにいることは好きで動物の少ない所か

らヤキやウサギのいる所へ自分でうつっていくとのこと。

コーナーの中にも、スラッと入って来た。

① 目を大きくみ開き動物の動きをみつめていて動こうとしない。

② カナダライの中のモルモットに気づき、こしをかがめて一匹す  
つながめるが手は出さない。モルモットの目に非常な興味をもつ  
たらしい。

③ 教師がそつとモルモットをだいてさし出すと、しばらくジッと  
ながめてから、モルモットの目をゆびさし、そつと目の下をさわ  
つてみながら「ニヤーニヤー」と言う。教師が「モルさん」と言  
うと、「モユさん」とまねていた。

④ ロップウサギをみつけ、近より「ニヤーニヤー」とよぶ。この  
時の手は方が入り、さわろうとしているようすだった。教師が

「ウサギ」と近よって言うと「ウサ・ウサ」といって顔を近づけていった。

⑤ 教師が「ウサギ」ともう一度言つて近づくと、両手でロップウ

サギの背中をさわつてみた。そして

顔中くしゃくしゃ

にして笑い、「ウ

ー・ウー」と言つ

て背中をさわつて

いた。

ちがう動物にさ

わりたくなると、

教師の所に来て手

を引っぱり、近づ

けてくれという態

度をした。この女

児の例から、二才

三才〇月 女児、父母、本人の三人家族

未満児には適切な指導が必要であることを強く感じさせられた。さ  
りたくともどうしてよいかわからない時に、助けの手をのべてあ  
げることが、がむしやらに動物に接し、かみつかれてけがをした  
り、びっくりしてこわがったりすることもふせげるのではないだろ

アパート住いのため動物がかえない。

父親は動物は何でも好きだが、飼えないのによく動物園に来る。



#### 例 4

うか。

それと同時に生きものの体のぬくもりから、生きものに対する愛  
を感じとるのではないか。

女兒は犬を非常にこわがり、ねこのいる家に行くとこわがって親のひざからはなれない。

犬をこわがった理由は、おつかいのかえり秋田犬にほえられてからのようにだと母親はゆう。

動物の絵本はよろこんでみるのだが、と父親はふしきがつている。

この子のように、自分の意志で来園するのではなく、親の意志や意図で来園してくる子も多いようである。

#### コーナー

父親がだき上げコーナーに入れようと、なだめたり、すかしたりしたが、くびにしがみついて入らない。むりに体をさくの中に入れると大声で泣き出してしまった。

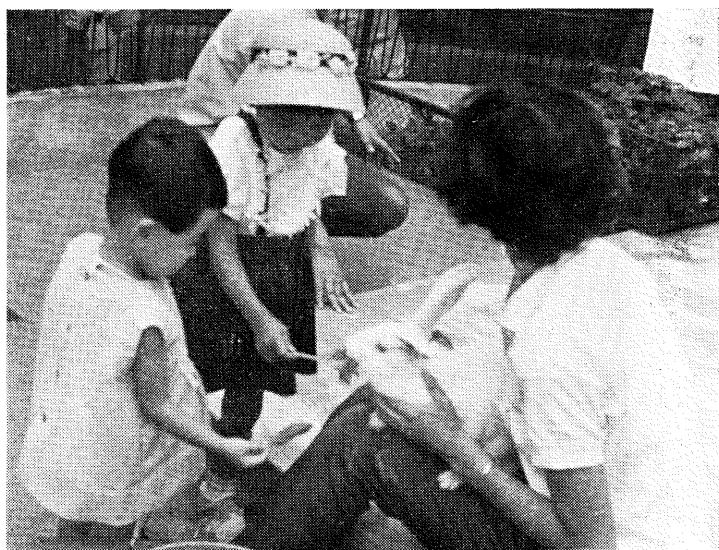
教師が、「むりをしないで少しようすを見てからにしましょう」と、さくの外でながめていることをすすめ、しばらくそつとしておいた。

#### さくの外で

泣きじやくりながらコーナーの中の動物の動きをおってながめていた。

コーナーの中の友たちが動物とおもしろいことをしたのを見ると、声を立てて笑ったり親に知らせたりしていた。ハトが気にいったらしく「ハト、ハト」と声に出して言うので、

① 私がそつとハトを持って行つたが、父親のくびにしがみついてうしろを向いてしまう。父親が手に取つて「ホラ、ハトよ、かわいいわねー」と声をかけると、



「イヤヨー」と力いっぱい父親のハトののつている手をおしゃってしまった。そこで私たち教師はまだむりだと思いハトをコーナーにかえして、知らん顔をしていた。

そのうち同じ年頃の女兒が、ウサギをさわろうと、おいかけはじめたのをみて、

「ウサギさん、ビヨンヒヨンてね」とよこにいる母親に話しかけた。母親は、「ウサギさんとヨーハイドンしてゐるのね、おみみヒヨコピヨコでしょ」と話をかえしていた。すると女兒も、「おみみピヨコピヨコして、ビヨンヒヨン」と言いながら、体をさくからり出して來た。

私は、その時、さくのまわりに動物が近よつてないのを見きわめ、父親にコーナーに入れてみては?とゆうサインをおくつた。

② スルッと女兒は、父親の手をすりぬけてコーナーに入り、教師のだくウサギの方にあるきだしたので、私はそつとえさをわたしめてみた。えさを持って女兒はウサギに近より、「ハイ、ハイ」とえさをウサギのはなさきにつき出していた。さくに近づいてから六分後に入る。

まださわる気にはならないようである。

③ そこで私は、白のモルモットをひざの上にのせ近づいてみた。すると、「あかちゃんウサギさんハイ」と、えさを半分にわってモルモットにやつていた。

④ モルモットがえさをたべないのであきらめ、「ウサギさんハイ、ハイ」と言いながら、白ウサギをおつていった。(9分後)

そしてウサギの前にまわり、自分の手でえさをたべさせることができた。

さくの外の父親に「たべちゃつた。たべちゃつた」とにこにこ顔で知らせた。

⑤ えさ台の下にもぐりこんだウサギに、なつぱをあげながら「よくかんでね」と話しかけたり、「おいで、おいで」とよんだりしていた。(15分後)

この女兒は、えさをやることに興味を持つたらしく、えさをよくたべるウサギをコーナーから出るまでおいかけてあそんだ。

この間、自分のそばにハトがこようが、カメが足にさわろうが見向きもしない。

片手でえさをたべさせ、片手でウサギの背中をなせている。

そのたのしそうな、安定して動物に接している姿は、私たち教師をも安定させてくれた。

いろいろな動物に接しなくとも、この女兒のように、一種類の動物だけに接しただけでも、接し方のふかさは、ずっとふかいと思われる。

このコーナーでの経験が、犬や猫に対する警戒心や、恐怖心を取りのぞいてくれたらと願つた。二三分でコーナーを出た。

この女兒をみていて私は、環境になじませたり、新しい経験をさせようと思う時は、ぜったいむりをしてはいけない、充分時間をかけ、本人自身の積極的な行動をまたなければいけない、と強く教えられたのである。

### 例 5

三才五月 男、祖母、母親、姉と来園

祖母、両親、姉、の五人家族

家庭

スピッツ犬 一匹をかつてている。

家中でスピッツをかわいがつてている。

男児 動物の遊具や玩具を好み、ピストルなどには見向きもしない。とくにぬいぐるみの動物を好みだいてねる。

どこの犬でも近よつていくのでこまる。

動物園は毎月一回来る。その時は子ども動物園にかならず入らないとおこって泣き出す。ヤギにえさをあげたり、おいかけたりして二〇分位たのしむ、のことだった。

① 自分で、コーナーのさくにかけより、よじのぼつて入ろうとしたので、私がすぐだき入れた。

目の前を通ったカメをみつけ、つかまえにいくが、ちょっと気持

ちわるそうに両手の三本の指先でつまんでいた。

② 次にもう一匹のちがうカメをみつけてさわりにいくが、やはりまだよつとけいかいしていたが、右手の指は全部、カメにつけ



ていられるようになった。しかしながら指先だけのようで、「ヨイショ、ヨイショ」と言っていた。

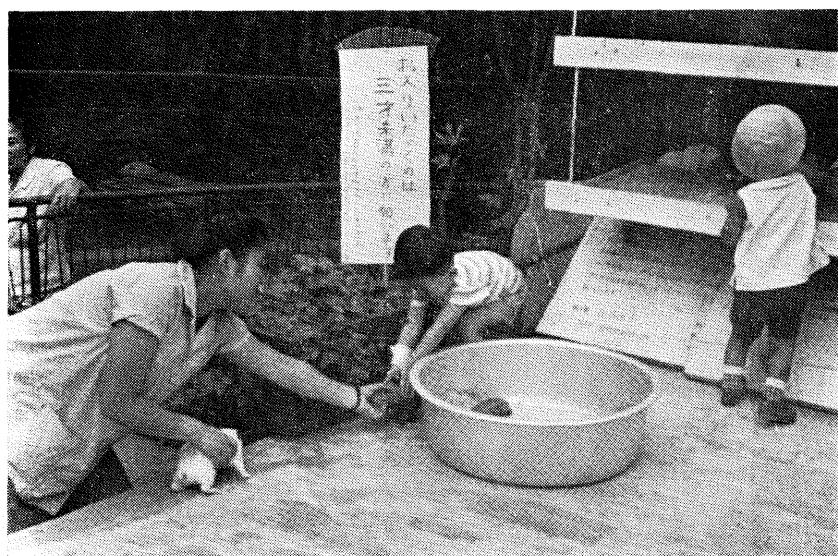
③ これを見ていた教師が、無ぞう作にカメを男児の胸もとにさし出すと、あわてて両手に力を入れて、カメをおし返して来た。「いやよ」と、でもこの時、両手全体がカメのこうらをさわっていた。これをみた私は一番小さいカメをそっと男児の足もとにおいてみた。すると、片手でカメをもち上げ、どかしてその場を通っていった。二分後このように間ばつを入れずに経験させることも子ども

の発展にやくだつようである。

④ ねそべっているウサギをみつけ、なっぱを持っていてたべさせた。ウサギが口をもぐもぐ動かしてたべるのにつられ、男児も口をもぐもぐかしている。

⑤ えさをたべさせ終ると、ウサギの目をのぞきこみ、「赤い、赤い」と言いながら目に指をつっこみそうにした。そこで私が、「いたいってウサギが泣くわよ」と手をそっぽはなすと、「いたいってゆう」と私の顔をふしきそうにながめていた。この動作は三回くりかえした。

⑥ 教師に、モルモットを持つようにたのみ自分はカメを持ち、「きょうそうじょう」と床にならべ、「ヨイドン」とはなした。カメが動かなくなると、おしりをおして「ほらはやく、いけいけ」とおうえんしていた。



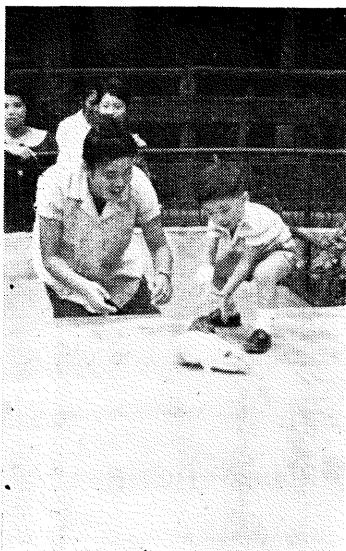
⑦ 今度は自分でウサギをおさえ、教師にカメを持たせて、「ヨーイドン」と言った。

こんどはウサギが動かないのでもぐれてしまい「いけいけ」とおしりを力いっぱいおしていた。

⑧ よくあるいてるカメを両手に一匹ずつ二匹持って来て、教師にウサギを持つようになら、「ヨーイドン、カメかて、カメかて」とおうえんした。(12分後)

今度はカメが勝ち、大喜びだった。

この男児のような場合、子どものするがままに動物をあたえておくと、目に指をつっこんだり、口の中に手を入れてかまれたり、とゆうことがおきるのではないかと思う。こんなに活発に動物を対等にあつかい、遊び相手として親しめる幼児には、私たち教師やおと



なは、して良いことと悪いことを、最初にきちんと指導しておきたいと考えた。

そうすれば、よその犬にも、がむしゃらに近より、手を出すようなことはなくなるのではないかと思った。

このように動物に積極的に接することができる幼児に、適切に指導の手をのばし、正しく動物と接しられるようにしたいものである。

#### 例 6

六才五月 女児 両親と来園  
家庭

両親と本人の三人ぐらし、日本家屋のアパート一部屋に住んでいますが、屋主が猫をかっている。その猫を、がむしゃらにつかんなり、ひっぱったりするようになつてこまつっている。動物のおもちゃは大好き。

#### コーナー

人見知りをしないのでだいてコーナーに入れてみた。

- ① ひざの上にこしかけさせ、他の教師がモルモットをさし出したが、コーナーの中の他の幼児の動きをながめ目でおつていた。
- ② しばらくそつとしておき、(約2分)えさ台の上に、モルモ

ツトをのせてみた、動き出したモルモットをみつけ、両手をバタつかせながら、体をのり出していった。

③ 次に、教師がそつとモルモットを近づけると、片手でそつと背中をなせた。わしづかみにしてしまうことは全くしなかつた。

#### (5分間位)

人見知りをしない○才児にも正しい指導の必要を強く感じた。

まわりのおとなが正しく愛情を持って動物に接する環境を作つてあげれば、けして動物をぎやくたいするような行動をしなくなるのではないか。○才児は、まだ動物も、おもちゃも同じようにしか感じない時なので、とくに、生きている物への接し方、感情でのつき合い方の指導には適していると考える。

#### むすび

このようにかぎられた時間での実験でも、

・保育室では見ることのできないような早さで効果があらわれていく。

・子どもたちが、三才未満児なりに（その年令に適した）経験のくりかえしによって活動を進歩させていく。（前から動物に近づくどこわいし、にげられてしまうが、うしろから近づくとたやすくさわれるなど）



・さわりたいなどの欲求をまんぞくさせるためには、あたえられた環境の中で考え、ちえをはたらかせるようになる。（さわるのがこわい子は、洋服のすその中に入ってくれと言つてくる。カナダライのままひっぱっているなど）

・動物をこわがっていた者が数分でなかよしになることがある。

・動物の動きに対して感情を率直にすなおに表わすようになる。

・動物をなかだちとして友だち関係がかんたんに作れる。

などの効果を体験することができた。それに加え、三才未満児の原始的な動きに対して、指導者は、どう接する方がより効果的かとゆうことの一面も知ることができたと思われる。



くためで、個々の幼児をみつめ、その場で適切にみきわめた指導をしなくてはならないことを学んだ。それは、

(こわがる子には、動きの少ないカメからあたえることがよく次はモルモットで次はもう少し大きいウサギがよい、などの概念は通用せず、ひとりひとりちがつたコースで近づけなくてはいけない。ハトからそっと近づけて成功した子、ウサギから近づけて、三分位でなじみ、成功した子などがあるからである。

私は三才までの幼児と動物とのふれ合いを見、指導して、こんな小さな幼ない子どもたちにも、あらゆる指導の可能性があることを知られ、教えられ、おどろきと喜びを強くかんじたのである。

そして、幼稚園、保育園でも、三才児に、正しく指導すれば、ウサギ、モルモット、カメの類ぐらいなら飼育し、友だちとしてあたえることが可能であり、必要であると思われた。

保育室の机の上の水そうの中のカメをじっと見る三才児、ママゴトコーナーの中で、どっかりこしをおろしてウサギの背中をなげたり、ベットのフトンの中にウサギをねかせたりできると考へる。

要は、フンをたべたり、かまれたりしない指導を正しく行ない、教師の手作りの飼育箱のかんりをよくしてあげればよけになることもないと思われる。

そして三才位の時から生きものに対する愛情、命を大切にすることなどをしつかり指導したいものである。

(関屋幼稚園)

(動物をこわくないようと知らせる時など、「こわくないわよ」と何一〇回も言うよりそつとだいたい動物を幼児の胸に近づけ、感覚を通して知らせることが非常に効果的のようである。

三才までの幼児は、私たち保育者の概念的な一般的な指導では全